

芭蕉五二十五個煉全

~ 5

1249



利  
1249  
卷

丁亥冬



苞莖解之修質之人也  
其七解之云友黨家子  
時我子解之七  
凡體中細之閑能也  
印渡氏小石川之水  
速於切而入深川苞莖菴  
出泉

歲三十七天下稱芭蕉翁十東西  
南北遊衍々况風雅女德門人  
玉中采兮歸芭蕉風一浪沈淪堂  
前苑在仁在道の止宿して病伏  
元禄七甲戌年十月十一日申の申刻  
卒云く年七十一同十日乙の乙刻祥家  
江別我仲有く葬式存牌真思く人

三井寺常任院侍應長く本家  
く右の方是の翁の遺を云く場の不の  
云未翁の病床小く穉世の吟を  
透の川の子の翁の言を曰く子の存を白  
今日の穉世今日の翁白の穉之の穉世  
あり我の心の於く白の白の穉世  
なの穉世の心の於く白の白の穉世

依て文章を去来し格を以て時を  
辨せしむる也

穉子病て母を

抱きて泣く也

沙白の病九日の疾ありし時  
白あり其後此如

## 二十五條

一 能信之道とす

或人問能信の道の心ありと云ふ  
と云ふ者曰信は身を以て  
しむる也又問能信の道と云ふ  
不如何者曰佛道は近處なり

儒道小波子なる道の字は成  
階破より教道小階階なるもの  
しるしと知れぬ及小通及小  
一のふ及現るなりと階階の  
波教連一舟の次小立くを句  
一階小格なり

二 階階二字之事

階階之二字は古来言身段魚なり  
字書を以て階の波なる言なり  
とも或は史記の階階を以て階の字  
子定よりとせんやこの程の如く  
也然れども古今集より階なる

字を引く来りまはりなりを八  
雲沙抄のちん鑑と云ふ所の三枚  
のちん鑑の我家の鑑の古くは  
と着破しつる眼より実とも  
妙とも名を別し定めらるる  
ことも云語は好むといふ及理を  
知るに我家の水と今より鑑鑑の

二字のちん鑑の他門の對し  
ちん鑑のちん鑑の妙

三 虚實之事

為物の虚實のちん鑑の實のちん鑑  
實のちん鑑の虚のちん鑑のちん鑑

實の己を互く人を恨みあひ  
ぬくの死の教を悲しく人の徳を  
惜しむ実の己の連弁は実の  
柳待弁連弁と云物と子小虚を  
ほくひらひ虚小実とを文章と  
いふ實小虚と汝世智本といふ  
實小実とを仁義礼智といふ

虚小虚と汝世智本といふ  
又多かる處に人をさうして我輩の  
傳文といふ

に爰化之事

文章と云子の爰化の事之爰化

虚に自由を以てて其の心を  
云々の心もたゞ〜〜〜  
〜〜〜も其の白〜〜〜  
云々の心も変化も〜〜〜  
其の白一念も〜〜〜  
変化も其の心〜〜〜  
は退屈するに情也い〜〜

他借りの心も其の心も  
心海を巡り〜〜〜  
小作の心も其の心も  
百篇の心も其の心も  
変化を知り〜〜〜  
〜〜〜の心も其の心も  
心も其の心も其の心も



爰此といふは、新古今の  
人、春秋の勢、古の勢、  
其日其海を、一巻の爰此  
於、一、爰此、人、  
の、味、外、張、も、  
悪くも、  
虚実、自在、と、  
一、

五紀集轉合之事

他、借、り、  
之、  
句、  
教、  
相、

物と一物を定むるの素の字或は將  
之の二物と支持を云ふ發白の  
陽小して服の陰より身と  
一將して天地より人なる如く  
人の天地より物にこそ然る天地  
より物より人を知る一物あり  
一合あり一命あり流の字の云

物と一物と定むるの素の字或は將  
之の二物と支持を云ふ發白の  
陽小して服の陰より身と  
一將して天地より人なる如く  
人の天地より物にこそ然る天地  
より物より人を知る一物あり  
一合あり一命あり流の字の云

一、發白、切字あり

發白、切字と云ふは発別の

乞 抄り 扱の 其 前 小 へ 是 下 也  
皆 以 也 破 之 一 案 之 身 出 候 別 之  
縦 切 字 之 案 白 之 所 也 切 れ ぬ  
附 中 之 案 白 小 切 之 候

桐の末々ころころ心多る様の内

此 白 其 文 字 少 々 乞 候 満 一 万 也  
切 字 の 末 々 一 身 小 也 論 義 切 字 之  
案 白 其 骨 柄 之 一 身 一

七 服 計 韻 有 事

服 之 志 別 一 身 之 貞 字 少 々

道とていふなり先初公一の教入り  
柔の字小か子へんが為なり

いふはれ名もむの如公の字

うれはれは名もむの如公の字

け白の初て能備は意味を以て公  
仇の在月結しつゝてまじふ

あるを其如連は一棒を以てし  
謀り心腹をえし如る取一白が對  
しそ服の体うゝゝ真字てしに左  
の鏡着如し是角服の柔白の  
余傷余也し心面ふく如る如し  
是し服の身柄持するの服の如し  
ちしは柔白のし是角服の如し

後たのまにさか公をまきけても兼白  
小云残~~~~る兼白山川の一字  
二字は凡情を加へて字の余情を  
長くとくけ残を蝶かゝる字にて  
身歩むるをいふをいふ

八身之身尔能兼之兼

身之白の字は~~~~の白の  
兼兼白やうなれ下は兼の兼  
眼の白及びほと~~~~の白  
知。内。小の字ての字も小も限る  
身~~~~の白身之兼  
やの如くと白白中も横字を  
視の仕敷を知るは兼張定り

多岐の物々 一 物振武の海  
なんを輝字抱字の沙汰を知らぬ  
人の推量也

かゝ物々も海に定むる如し

し何れも海に定むる如し  
一 海をいふは一の地也

桑白と糸白との一は其の如し  
白字の如く知る一は其の如し  
名も白と糸との如く其の如し

九の白月夜

白月夜の夜最生持の如し

神々々々大い嬉しき是れ  
桑白身之近き者推して  
一〇只やう白するやう  
多しと一巻入るは此の  
袖子と小あ物一合し  
秋の桑白より白す  
重く或は安く或は  
其の白

其時ハ夏代仕切  
以下ハ為め  
計帳といふ  
外借の

十月迄之事

月の風雅入的如し







宛とつらつらやう小付れは書し  
ほ〜但義の極小の極と  
しりて我れは知る〜

十二番季子正業書

月をぬも得〜たは季子付白+

其季子業の〜こと二之白を時ハ尚  
季子を捨教向より業正入た  
椰子業と教向を定たの業と  
何〜ら、長刀と教向を定り〜  
栲の月と何〜ら〜業二之白は  
時〜情を付〜云ハ二の業  
方〜も〜〜変化の爲るを

水子庭

十三 二季小波の物事

古より二季小波の物事を得乃  
彼者といひ秋の出来と云ふ所の  
字少くも乃秋の氣也此類の事

乃の是或る節句の二字各月強  
分る所の大なる植物の気合なり  
是又節句の季より得乃の氣  
秋の氣なり牡丹の氣より得乃  
此の氣氣小なる所の類多し之に  
並月ある秋の氣也月ある所の  
氣白ふけ得乃の氣の七白月の

月地乃字ゆゑ吳春の月なる。一  
ととておの秋れいふの秋と云ふ  
冬季然る。一 時小十月は冬  
と兼長季小なりは長兼と  
とて一 流電の長季も然る。一  
虫の類と兼なる。一 西白  
一のうたつれと兼なる。一 長兼を  
一

其外は此類めく知る。一 計程  
古式は如く種の名はあつた  
事也種の名と名おとる。一  
つれは張知りてさるる。一 種は  
相おとる。一

十代茶臼時季小用の中

或の歌は不承不承と云ふは歌頭の中にも歌  
痛拾ふものも尋常な事柄の物多し  
茶臼もその時の出来物かよひて合  
若かりし時とて一白の清くは悦ぶ  
悦ぶ事とてその時の出来物なれば  
白くたはしき物茶臼かよひて合  
不承不承とて尋常な事柄の物多し

又歌の白くても其意もよく  
季子を持つ白くても其意もよく  
いほひの能くはしき物とて  
此頃の及ぼす物茶臼かよひて合  
さうして合をせんさくことなれば

十世茶臼傳の歌之事

茶臼の塵風の落とるをへへ已り  
白を化して眼を因画子夜てん  
へへ死派おのつりて眼のま物也  
け故小能の流を先めけて心を  
浮小すの好り教と茶臼も附白も  
眼をまろく眼をまろく眼をまろく  
ろひるるるるしてんぬるの推量也

眼まろく付ると云ふ付ると付ると  
自門他門のやうなひ毎歳のふふ小  
屋かつて流集れ附合をてんく  
又合す度く

十六、附合茶臼板之書

茶臼者別也附白其甚座小居んく  
之惟小業ししう張也我を沉ぬれ  
教向も沉<sup>三</sup>成業外らうし人も業外  
一座終も成就と附白の社会の  
教向らうし心を落しつるがらう  
也け故小教向を定<sup>二</sup>の借文あり  
想と又まの業座にあり其座小

及て只以分別ぬる一<sup>一</sup>定家にも  
一<sup>一</sup>齊と業していふぬもの也と  
らましと也附白の身一<sup>一</sup>個子  
まのぬまたなれはこく<sup>一</sup>迷く  
座ししうたす進も久しう業  
ハ座かしと能も忽も一<sup>一</sup>座は  
ぬく<sup>一</sup>修<sup>一</sup>階の世と小使<sup>一</sup>の<sup>一</sup>を

三反知へんれ但〜大業の附先の  
云致〜存小名ひ通るの云  
活れ解く格別也

十七 敬白を定むる

附白の敬白を定む〜  
敬白

云一字二字三字小〜  
是至執中の法と云也  
最存を足す時ハ白子の教も  
お存小近〜人〜  
次を尋〜小其申隔〜  
十〜表ハ白敬白

祐極 豫長堂 暖心 時雨



學 子習子 月 新酒

民教句を定まると成る化も化も  
うらも武うらも成る化も化も  
愚白青黄の語の只白化も  
自法海如く法を知りてこれ  
人の俳諧は語をくちりて二字  
三字の教句より爰に其も此

小兒也。故小お教のうらも  
迷ふ如く故小法法を知りて人の  
教句を能うて存小教も小お  
爰にその如く今此の者如  
小公孫して其白法最をうら  
二字三字の教句を替へて其  
惜しむる者如くもなす右の

儒佛の書津式併勢としてその中より  
始るといふ事なり。天竺山道の  
一人は為小生を以て其申の事能  
なる事を知りて一と二と三と  
三字の教句も亦流るに其体の  
併附も亦も亦も其世小云其統  
といふ事素も亦も亦も其世の

を白ふ事なり。此の文字及び其小  
書を以て其世の事なり。其世の  
三取に其事なり。其世の事なり。  
云々の及理小書なり。其世の  
妙取なり。其世の事なり。其世の  
の二字なり。其世の事なり。其世の  
事なり。其世の事なり。其世の事なり。

の政はも人間必書と勸をも  
能るへ

十八 孫句之書

孫と下式を判しど其故、嫁娘  
杯時所傾城の文字名同めく

孫といふ孫と只一孫句小孫  
あゝの文字にかゝる孫と附  
へけ故小他門も孫を一白もて  
捨るより孫と凡娘の宛實其  
ハ二句より一孫句と孫と出陰陽の  
及此を定むる也是ハ我孫れ  
孫由かゝて他門へ句ひて實鑿

と海か〜ん

十九如字に傳ふ事

如字のる 依抄子に傳ふ事  
今世の対小推量多し大也  
玄妙如抄之 如字のるに我

論者如〜 依抄の推量多し大也  
述も、いふなり及記を公のり  
其外三片如二字如も今世の  
公のり

二字如  
山〜公の底や水の月

三字切

子芸若子と云、月吸好記

之辰切

梅お菜鞠子の島のこと

或いし梅いん屋鎌倉の崎小

目小を葉山時多る所録

とよぶるの月身にと云辰と云梅

乃葉の白と云の辰知る夏と云

二字切と字切の白の中おやといふ

いふと銀ひらんとおや字同義

いふ切おの一本也其

家月子今やこれ好の語

と云白のこの字いふ好なれ

切字小切〜切世類ありあり  
法集小切〜字欠抱〜字の切れ  
なり〜切字百五ても切好子後  
式

夕夜や秋〜夕〜の類

とりりり〜夕の夕夜や秋〜と

白濁を切〜夕の字小抱あり  
切字小切〜切世類あり〜式

猫の恋やむ時園の影月

是を中の切と云園の影月歌  
中白切を疎〜あり白法好

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

秋の歌をいふ小賞せて年忘れ

是をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
他の是別な故也此二の如く秋の

秋のいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

二十の賞合之事

能借小賞合の事いふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

のりあつてふれと一庵のり芳と  
物乞ふたふ先とへへ一白の好  
息を論してやうへ子の徳者  
めらへへ指合と愛化の互経也  
と先長坂をぬりへへ愛化のふ  
なりぬ世子指合れ指合ぬ物  
の法式はけ境よりぬりへへ

二十一 年海の松の白之事

年海の松の頭より勝ぬ

け茶白れ流るるを知らぬ茶白と  
やえ茶白の先別を知る茶白と  
一白の四は曲解といふ事あり



此白に記る曲わら松の節なる曲節  
の二つ記る者曲おも知るしむ事也

三平傳の松を云の歌歌少て

是の事こりんやふはななり許白来白  
より事と云松の歌と云事也

三平傳の松を歌歌入海と

是の只云の事毎の事小くて曲も  
なく節も物と記り此を白世傳と  
申す好沙流あれともそれ松の  
倫なり或は流る事と云を小に  
云く此小変定の詞をこれと云

松々ぬふいと姿は長しとるは流歌  
の靡長風のれ繼一舟あま  
ぬふゆ也てつ波やまのくひあふ  
的とあつは長のち根のこま浅  
んく舟と流つる甚死し  
身流の松の靡ふく句白かんと  
ふ姿長の津の姿長也あふ

二日月のち月身流あて

け白のちよく知く月はれ世  
ちれいふは身裁と日よこ  
あふんと姿長のかを流しつる  
をふく曲のよめか曲の茶白  
の身よ曲の子細と身流あて

二十二番小嶋の心之来

むらゝ家藏の深川山く嶋小文書  
の付つる心之来の付も知る  
人稀あり合文小附合の格式  
も知りへし

並の柵小文書を添えて

文書の深川山く嶋小文書  
是の最上の書紙は後舟の最上と  
見つる心之来の付も知る  
附つる心之来は類の最上と云を  
奈の心之来は心之来の付も知る  
物此最上と云ものなり或は最上  
軍書も又能知心之来の付も知る

さよと浪留程杯の拍子さよと  
あ〜つる風流なり

昔通り櫃の小舟を枕して

片元山小月をうんこ

是の氣白れ共文字を古伏の舟の  
あか〜て月をうんこ

或は来白れ外尚も隈も  
皆〜子細と事なり  
芳月を来めての必ず  
なまり

二十三宵園の白之事

五明の舟の裏ふ〜と

青香の白紙〜から白紙〜中〜十四  
子〜あ〜つ〜也

青香の白紙〜から白紙〜中〜十四

八月の秋の月夜〜の月

八月の秋の月夜〜の月

を青香に月〜付〜つ〜お鏡〜

対小鳥〜十白月〜を茶〜の心〜は  
念ふれ右〜と白紙〜を月〜を指せ  
多〜るを休〜む〜八月の月の字〜  
見渡り月の字〜茶〜の心〜は  
なり是張〜一度の掬〜と心〜を  
月〜と心〜は海〜と心〜を  
白紙〜を月〜の字〜の働〜と心〜

二十に名前の難之書

名取の奈白の歌と難の白も物々  
魚の衣を云ををりり河の白化  
必穂の海へ

物よりを難松崎を流公

名取の角ぬりかよ漢の歌

名取の角ぬりかよ漢の歌

け内漢の歌の白の雲觸の支那を  
たそくを境をくくぬる松といふ  
詞よりとらせぬをく必くも  
地元の南子あまか

是をを報とつてく念取の白乃  
猪式あり

来々 穢子忌もつ穢の面

とつ子白の穢且小例白乃

二十五何衣を八之身

世子是家うまはひとつてあ  
おれも解り小解心死也之終れ  
知れうつて首の女子をこの穢  
なりれとま其子の心るれは  
大既子知りて皆ぬるる穢  
お皆

さしゆらむもちつふらむも出ぬ  
さむつあつうと出てらふかきさ  
の経文をんさやうあうくつあ  
け類いゆゆあへん也

いんキク 冠輿の類  
ひアヒ入 葵雛の類

あふむおなりのひのゆきけ類  
この席出とて也

を きんを くに山をら

小桶 錢の字を小用

木 ねととねう 桶



緒 在少を 木の字、あかき紙

大 木庵お木の字、あかき紙

え は 日よ下子用

と 乙子月三輪の時下

名 声 柄

え 申のえ 清いさる 林いし 札いし 古いし 呉いし 之

へ うへりりり、是のこへへお子通

兼 是の古呉之、あかき紙

縁 えずけぬ之を又のつらへに借

を ふりぬ類也 鹽<sup>タテ</sup>井<sup>テ</sup>音<sup>ナ</sup>好<sup>シ</sup>

後 辰<sup>チ</sup>のたすはひ山の冬ス<sup>ト</sup>て

法 陣<sup>ホ</sup>ホ<sup>ウ</sup>シ<sup>シ</sup> 法<sup>ホ</sup>ウ<sup>シ</sup>シ<sup>シ</sup> 古<sup>コ</sup>案<sup>アン</sup>之<sup>ノ</sup>入<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>声<sup>カ</sup>

雜 サ<sup>サ</sup>フ<sup>フ</sup>拾<sup>シ</sup>ジ<sup>ジ</sup>フ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>類<sup>レ</sup>す<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup>声<sup>カ</sup>

ち さ<sup>サ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>氣<sup>キ</sup> フ<sup>フ</sup>ホ<sup>ホ</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>子<sup>コ</sup> せ<sup>セ</sup>づ<sup>ズ</sup>の<sup>ノ</sup>氣<sup>キ</sup> け<sup>ケ</sup>か<sup>カ</sup>なり<sup>リ</sup>

右者能借之新式有二十其條最  
我家之品目也昂於落柿舎自

書而不玄未識之不明自己之  
能借不傳寫他見最取道之  
尊宜也二時

芭蕉薈

允祿七<sup>甲</sup>成之歲六月

桃青  
刊

青雲橋立人々公勢子帳形さ  
身好く風流小志流く我も  
其首跋意の楹梅公家公徳子  
楚小つゝたろくく春命子依く  
一と給輒更々得一渡り端園の好  
濱く帳方くけ及を祝う後先臨  
を美くくく時来り又もけ及小

今く花形の折り〜薄地の辺り端紙  
いえる樓小舎〜心より花も色も  
面を合せぬ久〜心せ〜心せ〜  
於此に深〜月夜に余情小紙を  
いへ〜も我々七旬に紙を紙に  
燭の光〜心せぬか何うに記念  
か〜ら〜子孫〜紙に〜

古〜子古〜も紙出〜〜中〜小  
慈海流掃金〜志〜〜二十  
五ヶ條及の紙を〜紙〜紙〜紙  
紙の紙〜紙〜紙〜紙〜紙  
紙を紙〜紙を紙〜紙を紙  
おのれ〜紙の紙〜紙を紙  
自ら〜紙の紙〜紙を紙

ありんたふての秋志落ゆもさ  
庭とと枯草れむつらけぬ  
子首よ年を活け好もるをふて  
病のゆりむれく一物二物と出  
際り漸く一ととたをとん  
人らもあふもいふは折折の折れ  
粒の法ふまをく一ととと

流くと伏白院の

嘉永三庚辰

元月

七十  
不年  
菴

柳我



丁未年

